

津田昇平教話 別冊

生神金光大神大祭 祭主挨拶

令和二年十月十日

金光教尼崎教会

ただ今は、令和二年十月十日、金光教尼崎教会におかれ
ます。生いき神かみ金こん光こう大だい神じん様の御ご大たい祭さいを、麗うつくしくお仕つかえさせて頂たまいてお
ります。

この度は、神様をお祀まつりする内ない殿でんを、新しく設たえさせて頂たまくことが
できました。私わたくしが御ご道みちの教きょう師しにならせて頂たまいて、今いまで二十二年をお迎むか
えます。お結けっ界かいに座まらせて頂たまいたのは、学院がくいん（金光教学院）に入る二年ほ
ど前まへでしたので、もう二十四年ほどになるでしょうか。こうして神様の
御用ごようにお使つかいを頂たまいて、神様が難儀なんぎな人をお引ひき寄よせ下くださり、取り次とぎ
助すけける御用ごようにお使つかい下くださり、その中で、一人、また一人と、氏子うぢこが
お参まりをし、お取次とりつぎを頂たまき、神様のお徳を頂たまき、そして救すくわれていく。そう
いう道みちが伝つたわっていく。助すけかった人が、また人を呼よぶ。そしてまた、信心する

ようになる。その繰り返しでここまで来させて頂いたと、そのように思わせて頂いております。

教師にならして頂いてから、私は、この神様をお祀りする御扉を、是非でもおかげを頂きたいと、そのように願って参りました。いくつか理由はございますけれども、私の中で、夢を頂いたということがございます。私にとって、とても大事な御夢で、神様から頂いた御神夢である、そのように思わして頂いており、この御扉のおかげを頂くまでも、その夢を大事に大事に、自分の中でしております。今もしておりますし、これからも大事にするかと思えます。

今から二十年ほど前ですけれども、夢を見ました。私の目の前に、大きな木の扉びがあるんです。そしてその、目の前の大きな木の扉が、開あいていく。開あいていくと、そこにはですね、木が生えてるんですよ。木が生えているので、私わたくしは、その扉の中を見たいと思いました。すると、夢の中で私はもう扉の中に入り込んでいます。すると、木は一本どころではない。大きな大きな、深い森の中の、そしてまた誰も人が立ち入らないような、深く、そして美しく、苔こけがそこら中に生えている。樹齡何百年何千年というような、そう感じるような大木たいぼく、巨木きょぼく、そして、その木漏こもれ日ひが美しく、緑を照らしておりました。小さな小川すきまが、木と木の隙間すきまに流れ、蝶ちょうや、花はなや、いろいろな命いのちがそこに宿とどまっておりました。「美しいな

あ…こんなに美しいところは見たことがない」と、そのように思いました。

すると、風が吹いてきまして、私は、その風にスーッと乗って、その木と木の間をワァーッとこう、走って行くんですよね。体が走るんじゃない。私の視点だけが、ずーっと進んでいくんです。そして、その森の中をずーっと通っていくと、その木がなくなり、今度は美しい緑の草原が広がって、その草原は崖がけの上にあったようで、草原を突き抜けると、今度は広ーい海と、海の方ほうから太陽が。そしてその太陽の光はですね、とにかく眩まぶしくって、私に近づいてきて、私の命を包んで、私はその光に溶けて、消えていくんです。その温かく、美しく、強く、その光が私

を包んだと思った瞬間、私の命は、飛んで行きました。

どこに飛んで行ったか。今度は真つ暗闇の中で、私は立ってるんです。で、立ってると思ったなら実は浮いてた。周りを見渡すと、自分の足下に、大きな大きな星があるんです。もう見るからに、地球だなあと思いましたね。私の眼下に、青い地球。美しいその地球がですね、私の足下に、浮かんでるんですよ。それは大きかったです。

「美しいなあー！」と思いましたね。この天地宇宙、天地自然。「ああここは、天地金乃神様のお体なんだなあ」ということを感じたんですね。

「うわあ…あったかいなあ、すごいなあー！」と感動したら、今度はスーッとまた戻っていく。宇宙のところに行ったのが、今度はまた光のところ

に戻り、草原に戻り、海に戻り。で、深い森に入り、戻っていくんですよ。それで気が付いたら扉の前に立っていた。そして扉が静かに、閉じる。そこで目が覚めたんです。これが私にとって大きな御夢の一つでした。

で、私は目を覚ました時にですね、「あの光、見たことあるなあ…」と。そうなんです。私が十八歳の時に自殺未遂をして、生きることすら死ぬこともできなかった、そんな人間でしたけれども、神様に一心に縋っていく。その中で、神様が直々にお働き下さって、私を救い助けて下さった、そういう神秘体験がございました。その神秘体験で、光の体験、

光に包まれた体験、あれと同じ光だなあ…と思ったんですよね。

わたくし

私は、あの体験してからですね、もう一度でいいからあの体験してみたいと思うて、あの手この手でいろいろ考えて、同じ場所にも何度も行って、同じ心になろうとして。でもそうはいかないんですよ。でも、夢の中で、そういう体験をさせて頂けた。これ、私にとって大きなことでした。

目が覚めて、あの光は、あの時の、夢の中のあの光は、あの宇宙は、あの天地自然は、私があの時、もう生きるか死ぬかという時に会わして頂いた、現れて下さった、てんちかねのかみ天地金乃神様そのものだなあ…と、そう感じた

んですよね。そして、なるほど、御扉おとびりの中には天地金乃神様がおられるんだなあ…と。理屈で考えたら、そら木ですよ。所詮しよせんは木です。開けたところでやっぱり木です。でも、違う。私の頂く心が、感じるどころがあれば、その扉の世界というのは天地宇宙一切を司る、神様の御神体ごしんたいそのものに繋がつながっているんだなあ…ということを感じました。これが一つ目です。

その御夢みゆめを頂いてから程なくして、まあ一週間か二週間でしょうか、もう近かった記憶があります。また夢を見たんです。

それは、尼崎教会の御神前ごしんぜんのそこに、見たこともないような、やはり木

の扉があるんです。御神前が見えるわけじゃない。ここは御神前という
感覚はある。で、大きな木の扉ひらがある。そこがスーッと開くと、私はま
たあの世界に行けるかって、夢の中に思ってるんです。で、覗のぞいてみた。
そしたら、違う景色があるんです。

それは、私は上から眺ながめてるんですけど、ある一人の男性が、農家を
されてた、江戸時代のような、ああいう鍬くわを肩にかついで、そんな方が、
一人歩いてらっしゃった。山を。で、その方をずーっと見てると、その人
は、登りながら途中で、左の方に行かれたんです。左の方にも思っても、
そこは森の中に入って行く。そこには道はないんですよ。道はないけど、
その人はそこを通って行く。で、するとその後あとに、後ろから、ちよろっ、

ちよろっと人がまたやってきて、その人と同じ道を歩もうとする。で、気が付けば、多くの人たちが、その人が歩いた道と同じ道を歩んで行く。気が付くと、道がなかったところに道ができていく。

ところが、それをずーっと見てみると、「この人は、教祖様だなあ」ということに気付いたんです、覗きながら。あの人は教祖様だったんだ。で、多くの人たちがその道を歩もうと、付いて行こうとした。それが道になったんだなあ…と、そう思いました。

ところがです。多くの人がある分かれ道のところに来た時に、本当は左に行かなくちゃいけないのに、こっちでいいのか、あっちでいいのか。いや、こっちじゃないか。あっちじゃないか。左に行く人は多かったも

の、途中からちょっと右に行ってみようとして、右に行く人も出てきた。で、時代が経ち、人もだんだん移り変わり、それを私は扉わたしの中から覗のぞいてるんです。

で、そうすると、だんだんだんだん、右の人たち、右と左の分かれ目のところで、人がどんどん集たかってきました。集たかまってきた。で、これどっちに行くのか。左が正しいのか、右が正しいのか。話し声が聞こえる。「教祖様はどっちに行ったのか。左なのか右なのか」「いや、左じゃないか?」「右じゃないか?」そこで話し合いがある。それを脇目わきめも振らず、左に行く人もおれば、右に行く人もいる。でも分かれ道で多くの人が、だんだん集まって、そこで議論する。

で、右に行ったある人たちが戻ってきて、「こっちはいいぞー。こっちじゃないか?」って言うと、「そうかそうか」って、そちらの方に行く人たちが出てきた。で、気が付くと、そっちにみんなが行くようになってきて、左側に行く人が少なくなってきた。

で、ある時、右側に行った人たちが、大工さんを連れて、その分かれ道のところに来た。本当はそこに道標みちしるべがああって、このように矢印で、こっちの道って矢印があったのを、「だいぶ古くなったし、これも本当か分からないから」ということで、それを外して、新しく作り替えて、右の矢印にしました。するとそれからは、山を登ってくる人は、みんな右に行くようになりました。で、私はそれを覗きながら、「いや、違うのに。ほん

とは、あそこは左なのに。みんな右に行くようになってきた。『こっちがいい』『こっちでいい』そう思ってみんな、そっちに進んでいる。何の悪気もない。でも、本当は左なのになあ…。」と思っている。

そこで、私が気が付けば、同じ道に立っている。沢山の人たちがやほり横を通過って、登って、そして右に行く。私も登って行きました。そして、分かれ道のところですよ。ちょうど矢印が右に見える。で、左に道があったはずのところを見ると、もう道がないんです。もう草が生えて、人が通らなくなったら草も木も生えて、そこにはもう、前あった道がなくなってる。みんなは右に行く。迷わず右に行く。「右にどうぞ」というアナウンスをする人もいます。ところが私は御扉おひらの中から覗いていたから、

「いや本当は、教祖様は、あの方たちは、あっちに行ったのに」と思っ
て。だから私は、一人でその道を外れて、左の方に行きました。道はない
けれども、そこを歩いて行きました。

でいぼこの道。でも草もいっぱい生えている。そこをずーっと進んで
いくと、もう道はないんです。で、かなり傾斜けいさつもある。そこを歩いて行く
と、小さな祠ひらがあっちこっちに点々としてるんです。で、その祠も苔こけが
生えていて読めない。でもそこを、私は手で、苔を取ると、名前が書いて
ある。直信なほのぶの先生の名前でした。そして向こうの祠がある。だいぶ離れ
たところに祠がある。そこに行ってまた覗いてみた。これは、また違う
直信の先生だ。よく見ると、あっちこっちにすごい広い範囲で、小さ

な祠がある。そこを見ていくと、やっぱり直信ちくしんの先生、先覚せんかくの先生、先師せんしの先生、多くの先生方の、そして高德こうたかな、徳があるとされる先生方の、そういう祠がある。

私は前に前に進んで行くと、だんだん祠が少なくなってきました。でも、ぽつっ、ぽつっぽつっと祠がある。その名前を確認すると、有名な先生のお名前が出てくる。その先に教祖様いらっしゃるんじゃないか。私はそう感じた。ところが、歩いてみてもどこにもない。そのうち、祠がなくなった。でも、もう少し歩いてみようと、歩いていると、その森の中にちよつとこのお広前ひろまへべらべらいの間あひだ、そこだけ木がない場所があった。草は生えていたる。そこに逆さからさかり着きて、一畳いっじやうほどの祠があったんです。で、そこにはご祈

念するような場所があった。石畳でした。で、石と石との間に、草が生えている。だいぶ朽ちてるようです。でも、そこには優しい光が、太陽の光が差し込んでいる。浴びている。で、それを見て、「ああ、ここは教祖様の奥城おくしやうだなあ。教祖様のお墓おぼろだなあ。教祖様はここにいらっしやっただなあ…」というところで、目が覚めたんですね。

で、目が覚めて私は思いました。これは、私が学院生時代に金光様にお取次おとりごを頂いた時の話を、私はふと思い出したんですね。どんな話かと言いましたらね、私は金光様に、五代金光様に、たくさんお取次を頂きました。その中で印象的なみ教えはいくつもありますけれども、その

中の一つに、ある時金光様が私の方を向いて、「誰もが生神金光大神いきがみこんこうたいじんになれる」と、そう私に仰ったんです。で、私はもうちょっとびっくりしたんですね。「生神金光大神様」ってお唱えすると、教祖様しかイメージできない。誰もが教祖様になるなんて、とてもじゃないけど思えない、と。

けれども、その後何度かそのことについてお尋ねしたけれども、金光様は間違った言葉仰っておられない。やっぱり「生神金光大神になれる」という、そういうお言葉を残しておられる。で、私わたくしは、「では、生神金光大神にならせて頂くのは、どうしたらよろしいでしょうか」とお伺いしたんです。そしたら金光様が、ムツとした顔してね、「それを学ぶためにここに來てるんでしょ」「って、私、叱しかられたんですよ。考えなさい、

練り出しなさい、とごうごうなさい。

それで、私は、四月に学院を卒業して、六月の十日、教師を拝命する時ですね。最後に、学院を卒業して、教師にならして頂きましたと、その御礼のお届けを、金光様にさせて頂きました。で、その時に、無事に教師にならせて頂きましたという御礼と、「これから教師にならして頂いて、御用させて頂く。その上で生涯これを大事にしなさいという、そういうみ教えはございませんでしょうか」とごうごう伺いしたら、すると、金光様は、「これまであなたがしたためてきたものがあるでしょう。」「したためてきたというのは、私が金光様のお取次を頂いた、もう一言一句書いたものがある。それをプリントアウトして、金光様に見て頂いて、手直

しました。それは『現教主 五代金光様の御理解』っていう本をですね、数年前に上梓じょうしすることができました。で、それをですね、「それさえ大事にしてたら、もうそれで結構です」って言って頂いたんですね。私は、「ああ、そうだろうなあ」と思いました。帰りの電車の中ですね、新幹線に乗りながら、「そろそろだな」と。「仰った通りだな」と。その時に何を思ったのか。何を考えたのか、書いたものがあります。「これは、書籍しゆせきの一番最後のお取次の項目なんです。で、それを、私は述懐じゆわいしてるところがある。ちよっと読んでみましょう。平成十一年六月十日ですね。ちよっと読んでみます。

ですの、この金光様のお言葉は大変有り難くて仕方がありませんでした。と申しますのも、「あれを大切にされていければ、それで結構でございます。それだけで結構でございます」とのお言葉には、裏を返せば、あのしたためた中に御道おみちの全てが詰まっているから、それを頂けば楽であるとお知らせでもあるのですから。私わたくしが、あのしたためた中身を求めに求め、貫きに貫き通せば、私わたくしは以前に金光様を通して天地の親神様おやがみから頂きまし
たお言葉通り、「生神金光大神いみがみこんこうだいじんとならせて頂くことができ
る」のでありますから。あとは私次第であるということ
になるのですから。

それを思い出すと、金光様のお言葉を頂きまして、お結界を下がります時には、私は何とも言えぬ、「やってやる」というふつつつ湧いてくる目に見えぬ力を、生命の内側に感じておりました。

一年という修行の中で、幾度となくお取次を頂きに参る中におきまして、どこまでも私を育てに育てようとして下さる金光様の温かな光のこもった御思いに思いを馳せますと、何があっても私は、必ず生神金光大神にならねばならないと感じるのでございます。

生神金光大神になると申し上げますと、恐れ多く失礼極まりないのお言葉を頂戴いたしそうですが、けれど

も私わたくしは、天地の親神様の神御徳かみみとくを頂き通してある者として、また神の願いに生かして頂くこころぎと志した者として、どこまでも生神金光大神にならせて頂くことこそが、天地金乃神様てんちかねのかみに対しましても、教祖生神金光大神様かみに対しましても、なんら失礼なことではなく、それどころか最大の御礼おんれいであると感じておりますし、むしろならせて頂かないことこそが、ここまでおかげを頂きに頂いて、金光様のお取次を頂いて参った者として、最大の御無礼であると感じているのであります。

私わたくしは、お結界を下がりまして、教祖様に始まる取次の業わざがここから始まった、この本部広前におきまして、生

きている間に神にならせて頂きたくご祈念させて頂き、
そして尼崎へと向かわせて頂きました。

(本部広前にて記し、車中でまとめる)

平成十一年六月十日 昇平書

〔現教主 五代金光様の御理解 一〇四〜一〇六頁〕
ページ

と、書いてあります。

これをですね、その御夢みゆめですね、二つ目の御夢。御扉おとひらの中で教祖様のお姿を見た。教祖様が示されて開かれた道。皆それを求めて歩んできたけれど、気が付けば違う道に行った。でも、道がなくなってしまったけ

れども、私はそこを覗のぞかして頂いていた。御扉の中から。そして夢の中で私はそこを、また、通らして頂く。直信じきしん先覚せんかく先生の先生が通られたところ。その奥に教祖様のお墓がある。これは、私わたしが教師にならして頂く、教主金光様にお約束申し上げた、神様にお約束申し上げた、生神いきがみ金光こんこう大神だいじんにならして頂くことができる。誰もがならして頂くことができる。ならば私わたしもならして頂かねばならないというその心から、御道おみちの教師の御用ごようが始まったことを思いましてね、「ああ…これを、御夢みゆめを見せて下さったのは、神様が私わたしに何か願いをかけて下さってるのではないか。一人一人に願いをかけて下さってるのはもちろんのこと、私わたしにも願いをかけて下さっている。その願いが、この夢の中に込められているのではな

いか」そう感じました。

そして、御扉の中には天地金乃神様てんちかねのかみだけではない。教祖生神金光大神様が示された、人が助かる道というものも、そこには込められている。

そこにはある。教祖様の祠ほこがある。教祖様だけじゃない。教祖様を求めた、その時、その広前ひろまへの生神金光大神なまがみ取次者、その広前の金光大神、その祠ほこがあった。そうか、この御扉の中には、天地金乃神様と生神金光大神様が祀まつられてるんだなあ。そのお徳、お力、お働き、ご慈愛じあい、それが込められているんだなあ…ということを、目が覚めて感じたんですね。

それから私わたしは、御扉みびらを頂きたい、そう願うようになりました。そこか

ら神様にお縋り^{すが}して御用にお使い頂いて、御扉を頂くといいまして、そんな簡単なことではございませんでしたけれども、こうして教師にならして頂いて、二十年少し経ってようやく、願った通りにおかげを蒙^{ごも}らして頂きました。

教師にならして頂いて、御神具^{ごしんぐ}を整えさして頂く。その時いつも宮清^{みやせい}神具店さんをお願いしてたんですね。今日玉串^{たまぐし}をされたご年配^{なついで}の三井さんという方。私はいつも宮清さん、宮清さん言ってますけど。教師になった一年目の時から、御神具のことをお願いし、いろいろお話を聞かして頂き、もうその時から、「宮清さんが生きてらっしゃる間に、御扉のおかけ頂きますからね」と。「ああ、そうですね！」って言いながら、ど

これまで本気で思ってたか分らんのやけど、でもほんとおかげを頂きました。

宮清さんもあれから、もう二十数年前ですからね。あれからもお年を召されて、今はもう八十歳を越えていらっしゃる。でも、ご存命の時に、お元氣な時に、こうして御扉を作って頂くことができました。で、その跡取りの林さんはやしという方も、一緒になって御扉を作って下さり、多くの御神具を作って下さる。これはほんとに、私わたしにとってありがたいなあ。これもまた一つ夢が叶かなった。誰に御扉を作って頂くっていうだけじゃない。宮清さんに作って頂きたいという、私、願いがありましたからねえ。それも含めて神様、おかげを下さったなあ、そのように思わせて頂い

ております。

で、私わたくしは神様に一心しんに縋すがらして頂いたら、神様がふと、御言葉を下さる時がある。その御言葉を神様が「書きなさい」と、「書き付けせよ」と仰る時がある。たくさんありました。学院の時はありましたけれども、これは平成十七年四月二十一日夜九時二十分。内殿ないでんでご祈念してる時です。私わたくしがその時から御扉おとびを頂きたいと願っていた。願っていたんですよ。願っていたけれども、神様はその時、こう仰ったんです。

神は扉はいらぬ。神が欲しいのは神が世に出る扉である。

天地書附てんちかきつけもいらぬ。神が欲しいのは天地金てんちかね乃神のかみが世に現れるための扉である。その扉はお前が鍵かぎである。生神金光大神いきがみこんこうだいじんでなければ扉は開あかぬ。故ゆえにお前が生神金光大神いきがみこんこうだいじんにならねば鍵が合あわぬことになり、扉が開あかぬぞ。どうすれば生神金光大神になるかは神がおいおいと教えてやる。書き留めておけよ。

〔平成十七年四月二十一日夜九時二十分 御裁伝ごさいでん〕

これが、私の中で最後の、大きな大きな御扉おとらを作らして頂きたいと願うことになりました。御夢みゆめが二つある。もちろんその御夢の前に、私が

自殺未遂をしたところから助けて頂いたことやら、金光様のお取次とりつぎを頂いて、生神いきがみ金光大神こんこうたじんになれると、ならしてもらいなさいという願いをかけて頂いた。私はそう頂いた。そのこともある。そして最後、このようにして、御扉おとびを願った時に、「扉はいらぬ。でも、扉は欲しい」。

神様はただ、形のある扉が欲しいわけじゃない。そこは人が助かる、神様が、働たくきが現れる、人を取り次ぎ助ける、金光大神という、その神の働たくきが現れる、そんな扉が欲しいと仰おんる。御神米ごしんまいでも、御神酒おみぎでも、ただの米、ただの酒、御扉おとびだったただの木。そうなんです。でもね、頂く人の心の中に、神様を祀まつっていけば、そこには神様が宿り、神様のお徳、神様のお力が宿るんです。そこに御神米があり、米が御神米になり、酒が御

神酒になり、ただの木の扉が、神様が御座おわします、金光大神様が御座します、御扉になるんです。ただ単に神様は形が欲しいわけじゃないと仰る。でも神様が欲しいのは、本当の意味で神様が現れる、金光大神が働ける、そんな扉が神は欲しい、と。そのために鍵かぎがいる。鍵あが開かなければ扉は開あかない。鍵とは、私であると。私のこのお広前ひろまえは、私が鍵である。この広前の守りもである私わたくしが鍵となって、その扉を開あければ、私が頂てんく天地金乃神様ちのかねのかみ、私が頂てんく生神金光大神様が現れて、参ってくる人を取り次ぎ助けて、お働き下さる。そう感じるんですね。

ですので、この御扉の中には天地金乃神様、生神金光大神様がお祀りされてあります。それは私の中で、祀る心があるから。天地金乃神様を

私の中で祀り、生神金光大神様を私の中で祀り、その祀る心をこの御扉の中に込めるんです。だから、多くの人がこの御扉の奥に、天地宇宙を司る神様、人を正しい道に教え導いて下さる教祖様のお働き、生神金光大神取次の働किが込められているんです。

そのような願いを持って、御扉おひらを是ぜが非ひでもおかげ頂きたいと願い、二十年経って、神様からようやく、そろそろ扉を授けてもいい頃、と言いって頂いたんであろうと思います。早く早くと申しましても、それだけの器が私になかったのでしょうか。でも、こうしておかげを頂いたといういことは、その器うがようやく神様からい覧らんになって、できたということだ、

お授け下さったのでしよう。私の身に余るような立派な御扉でございませけれども、この御扉は、私の思い、祈り、神様の願い、教祖様の願いが込められております。それはもちろん、人を助けたいということ。世間になんぼうも難儀なんぎな氏子うじこあり、取次ぎ助けてくれ。神を助けてくれ。人が助からねば神が助からぬ。そういう神様を、氏子を、助けようと教祖様がお働き下さった。そのお働きを私わたくしも御道おみちの一人の教師として、命を懸かけて、ここからも御用にお使い頂きたい。その言わば、願いであり、改めての誓いであり、そのためにこの御扉のおかげを頂きました。

どうぞこれから、お参りをなさる方もそれぞれに柏手かしわでを打たれること

かと思えます。また、御扉の奥には神様、私が頂く、私がお祀りする
てんちかねのかみ 天地金乃神様、いきがみこんこうだいじん 生神金光大神様がお祀りされてありますから、どうぞ、そ
のお徳、おかげを頂いて、ここからも神様に喜んで頂けるような、その
ようなおかげを頂いてもらいたいと、そのように願わせて頂いておりま
す。

普段はなかなかお話するようなことも、もうございませぬ。お話する
ことはもうないと宣言しておりました。けれども神様は、「これは話をさ
してもらえ」と言って下さったので、あ有り難くがたお話をさせて頂くことが
できました。あごわいご挨拶に代えさせて頂きます。

3)



津田昇平教話 別冊

生神金光大神大祭 祭主挨拶

令和二年十月十日

金光教尼崎教会

令和四年三月二三日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五

